

アーカイブ研究の現在

～「トライアル研究」発表会 2018 から～

メディア研究部 宮田 章 / 鳥谷部寛巳

NHKは2010年から、NHKアーカイブ스에保管されている放送番組を学術利用に供する事業「トライアル研究」を行っている。本稿は、「トライアル研究」の仕組みと、スタート以来の経緯を記すとともに、2018年7月14日に東京のNHK放送博物館で行われた研究発表会の模様を報告する。あわせて、主に研究者の立場からアーカイブ研究の現在を概観するものである。8年間の「トライアル」の間にアーカイブ研究は徐々にではあるが進展し、興味深い分節を見せている。

1. はじめに

アーカイブ研究とは、「アーカイブに保管されている放送番組を資料として用いる研究」である。さしあたりはっきりしているのは資料のありか(放送番組のアーカイブ)だけという、まだ茫洋とした研究分野であり、またその分自由な研究分野である。2010年にNHKが、NHKアーカイブ스에保管されている放送番組を学術研究に供する事業「学術利用トライアル研究」を始めたことが、アーカイブ研究が広まる大きな契機となった(16年に「NHK番組アーカイブス 学術利用トライアル」と改称。本稿では以下一括して「トライアル研究」と記す)。

本稿は、「トライアル研究」の仕組みとスタート以来の経緯を記すとともに、これまでの「トライアル研究」の成果を集約し、アーカイブ研究の一層の発展につなげることを趣旨として、18年7月14日に東京のNHK放送博物館で開催された研究発表会の模様を報告する。あわ

せて、主に研究者の立場からアーカイブ研究の現在を概観する。

本稿の構成は以下のとおりである。

1. はじめに
2. 「トライアル研究」の仕組みと経緯
3. 研究分類と選考
4. 今回発表された研究
5. 結びにかえて —アーカイブ研究の現在—

8年間の「トライアル」の間にアーカイブ研究は徐々にではあるが進展し、興味深い分節を見せている。今回の研究発表会では、アーカイブ研究を番組研究、表象研究、対象研究の3部門に分けて、「トライアル研究」から生まれた論文を選考した。これまでになかった研究分類である(第3節)。部門ごとに選考され、発表された研究は、研究者が放送番組を用いて何を問うか、また映像と音声のテキストである放送番組をどう分析するかを考えるうえで参

考になるはずである(第4節)。

執筆は、第1節・第3節・第5節を宮田が、第2節・第4節を鳥谷部が担当した。

2. 「トライアル研究」の仕組みと経緯

2-1 放送資産を社会還元する試み

NHK アーカイブスには、96万9,000本の番組、759万4,000項目のニュースが保管されている(2018年3月末時点)。世界有数の膨大な量の放送資産である。これを学術研究に役立てたいという要望は、以前より多く寄せられていた。そこでNHKは2009年、放送資産の社会還元を進めつつ、それによって保存番組の新たな価値創出につながることをも期待し、学術研究に限定して無料で閲覧できるサービスの試行的運用を開始することにした。外部の学識経験者を招いて実行委員会を組織し、11月から研究の公募を開始。翌10年1月の審査で5件の研究が採択され、3月から埼玉県川口市にあるNHKアーカイブスの研究閲覧室で利用が始まった。10月からはNHK大阪放送局でも閲覧可能になった。

以降、14年にかけて年1～2回のペースで公募・採択・閲覧がなされた。16年度からはニュースは閲覧対象外となったが、より多くの研究者に利用されるよう公募の回数を年4回に増やした。また、首都圏の閲覧場所は川口市から東京都港区にあるNHK放送博物館に移された。

以下、現行の「トライアル研究」の仕組みについて主なポイントを挙げておく(詳細は「学術利用トライアル」公式ウェブサイト¹⁾を参照(写真1)されたい)。



写真1 「学術利用トライアル」公式ウェブサイト

- 閲覧できる番組は、ラジオ時代のものから最近のものまで、NHKが過去に放送したさまざまなジャンルのテレビ・ラジオ番組で、一般には公開されていない約65万本である²⁾。NHKが放送番組の組織的な保管を始めた1981年以降放送のものが中心で、過去に放送された番組すべてがあるわけではない。また、保管されている番組でも、NHKに著作権がないもの、人権保護の配慮が必要なもの等は閲覧対象外となっている。
- 応募資格は、大学または高等専門学校、公的研究所に所属する教員・研究者、大学院生、外国人研究者で、必要な条件を満たしていること。個人でもグループでも応募できる。
- 研究のテーマは自由だが、NHKアーカイブスに保管されている番組の分析が研究論文の重要部分となるものに限る。また、学会誌等への寄稿論文、大学紀要への掲載論文、博士・修士論文等、アーカイブス学術利用の結果として「論文」の執筆が行われることを前提とする。
- 応募にあたり、ウェブサイト「NHKクロニクル」³⁾(保存番組の検索サイト)を見て閲

覧したい番組のリストを作成し、「学術利用トライアル」のウェブサイトに応募フォームに必要事項を記入して事務局あてに送信する。

- 審査は、NHKが委嘱をしている学識経験者3人⁴⁾とNHKの担当者2人で構成される審査委員会が行う。審査の評価基準は「研究テーマの重要性・新規性」「NHKアーカイブス利用の妥当性」「研究方法と計画の

妥当性・現実性」の3つ。採用枠は東京6、大阪3を基本とする。

- 採択された研究については、研究課題・応募者・研究概要を学術利用トライアルのウェブサイトで公表する。
- 採択された研究者は、閲覧に関するオリエンテーションを受けて、所定の場所（東京はNHK放送博物館内の2ブース、大阪はNHK大阪放送局内の1ブース）で研究閲覧

表1 「トライアル研究」応募・採択件数（2018年度第2回終了時点）

学術利用トライアル I	応募			採択		
	「学術利用」*	関西	合計	「学術利用」	関西	合計
第1期 〈閲覧期間〉2010年3～8月	14		14	5		5
第2期 2010年9月～2011年8月	22		22	10		10
第3期 2011年9月～2012年3月	17		17	7		7
計	53		53	22		22
関西トライアル I						
2011年4月～2012年3月		8	8		5	5
トライアル I 総計	53	8	61	22	5	27
学術利用トライアル II ・関西トライアル II						
	応募			採択		
	「学術利用」	関西	合計	「学術利用」	関西	合計
第1期 2012年10月～2013年3月	16	11	27	9	7	16
第2期 2013年4～9月	12	3	15	7	3	10
第3期 2013年10月～2014年3月	15	6	21	9	4	13
トライアル II 総計	43	20	63	25	14	39
トライアル I ・ II 総計	96	28	124	47	19	66

※「学術利用」は埼玉県川口市での閲覧枠

2016年度	応募			採択		
	東京	大阪	合計	東京	大阪	合計
第1回 〈閲覧期間〉2016年3～5月	6	7	13	6	3	9
第2回 2016年6～8月	7	4	11	6	3	9
第3回 2016年9～11月	4	5	9	3	4	7
第4回 2016年12月～2017年2月	8	3	11	6	3	9
2016年度総計	25	19	44	21	13	34

2017年度	応募			採択		
	東京	大阪	合計	東京	大阪	合計
第1回 2017年3～5月	9	1	10	7	1	8
第2回 2017年6～8月	13	2	15	6	2	8
第3回 2017年9～11月	15	3	18	6	3	9
第4回 2017年12月～2018年2月	7	0	7	6	0	6
2017年度総計	44	6	50	25	6	31

2018年度	応募			採択		
	東京	大阪	合計	東京	大阪	合計
第1回 2018年3～5月	6	3	9	6	3	9
第2回 2018年6～8月	8	4	12	6	3	9
第3回 2018年9～11月						
第4回 2018年12月～2019年2月						
2018年度第2回まで計	14	7	21	12	6	18
2016～18年度第2回まで全体計	83	32	115	58	25	83
全体総数	179	60	239	105	44	149

する。スケジュールおよび閲覧番組は事前の申請に基づく。閲覧の日数は1件の研究につき最長20日まで、閲覧番組は原則30本以内⁵⁾。試写用DVD(音声番組はCD)を再生機で視聴(聴取)する。

- 閲覧終了後、研究者は今後の研究見通しや、成果としての論文発表のめど等について報告書を事務局へ提出する。
- 研究論文を執筆し、完成後、事務局へ提出する。

こうした枠組みは初期段階のものを基本としながら若干の修正がなされて現在に至っている。初回(閲覧10年3~8月)から18年度第2回(閲覧6~8月)までの応募総数は239件、採択総数は149件である(表1)。

2-2 成果の蓄積から研究発表会へ

「トライアル研究」が始まってから8年。これまでに、採択された149組の研究者がNHKアーカイブスの番組を閲覧した。そこから生まれた成果論文は61本(99~100ページ表2)、研究発表は65件(101~102ページ表3)である(いずれも18年3月末時点)。

なお、これまでに発表された論文はいずれも、研究閲覧が16年11月以前になされている。番組を閲覧したあと、研究論文を書き上げるまでには相当の日数を要するため、論文の数は今後なお増加するものと思われる。

「トライアル研究」から生まれた成果論文、研究発表が相当数に達した状況を受けて、事務局は17年末、審査委員と協議し、これまでの「トライアル研究」の成果を集約し、アーカイブ研究の一層の発展につなげることを趣旨として、研究発表会を開くことを決めた。発表の対象は

61本の論文の中から選考し、研究に使用した番組を会場で一部上映することにした。

3. 研究分類と選考

3-1 アーカイブ研究の3分類

NHKアーカイブスに保管されている番組テキストは、その広さと深さに圧倒されるようなテキストの大森林を形成している。100万本に及ぼうとするこの膨大なテキスト群のうち、どのテキストに光を当て、どんな知見を取り出すか、それを決めるのは第一に各研究者の問い(問題関心)である。各研究者の一つ一つの問いこそが広大なテキストの森に小さな踏み跡を刻み、鬱蒼とした大森林に少しずつ道をつけてきたと言えよう。

2010年から現在に至る8年間の「トライアル研究」⁶⁾から生まれた61本の論文を通読すると、NHKアーカイブスにアクセスした研究者たちの問いが、大まかに下記の3つに類別できることがわかる。

- 1.制作手法など放送番組そのものを問うもの。
- 2.放送番組が特定の事物・人物をどう描いたか(伝えたか)を問うもの。あるいは特定の事物・人物が放送番組にどう描かれたか(伝えられたか)を問うもの。
- 3.放送番組によって描かれた(伝えられた)事物・人物について問うもの。

それぞれ例を挙げながら説明していこう。

1は、たとえば設楽馨の問いである(表2-①④⑨)。設楽はテレビ番組に含まれるテロップの数量に注目して、その経年変化を問うた。丸山友美はドキュメンタリーとは何かという原

理的な問いを2度にわたって立てている(表2-⑳㉘)。また瀬崎圭二が和田勉の演出技法を問うた(表2-㉙)のように、特定の制作者の「作風」への問いも、このグループに含めることができるだろう。

2は、たとえば渡邊友一郎の問いである(表2-㉚)。渡邊は、09年に起こった新型インフルエンザの発覚⇒感染拡大⇒収束を放送番組がどのように伝えたかを問うた。また関礼子が問うたのは、尾瀬・檜枝岐^{ひのえまた}という特定の地域を放送番組がどう描いたかということである(表2-㉛)。この問いから関は、同地域への放送番組の「まなごし」が、桃源郷礼賛から、貧しさの強調、そして観光資源としての伝統賛美へと、経年的に変化したという知見に達している。

3は、たとえば津田好子の問いである(表2-㉜)。津田は『おかあさんの勉強室』という教育テレビの番組を資料として、1980年代の母親規範を問うている。文献資料や、先行する社会学的知見も援用した研究である。また、兼古勝史(共同研究者:鳥越けい子,小林田鶴子)の問いは、今は絶えてしまった暮らしの中の音風景(サウンドスケープ)を、放送番組を資料として知ろうとするものである(表2-㉝)。放送番組が持つ意外な資料性に気づかせてくれる問いである。

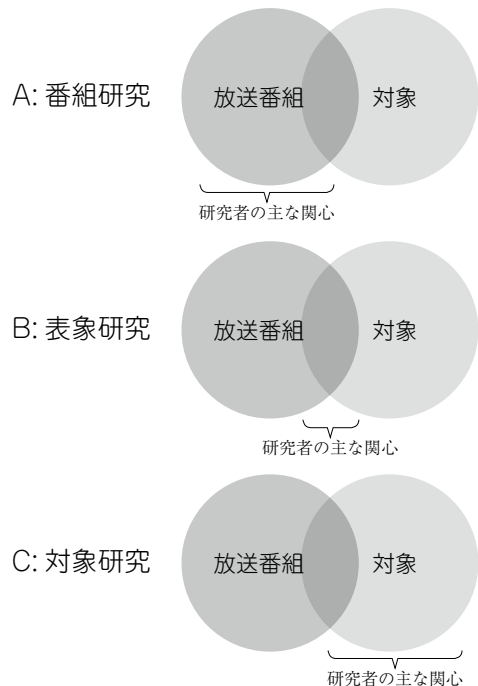
以上3つの問いの類別から、アーカイブ研究を3つに分類することができる⁷⁾。

- A. 番組研究：制作手法など放送番組そのものを問う研究。
- B. 表象研究：放送番組が特定の事物・人物(対象)をどう表象したかを問う研究。
- C. 対象研究：放送番組を用いて、番組が表象している対象について問う研究。

放送番組には、必ずそれが表象する(描く、伝える)対象がある。表象する側(番組, 作り手)に主な関心を持つのが番組研究であり、表象される側(対象)に主な関心を持つのが対象研究である。そして、特定の放送番組が特定の対象をどう表象しているかに主な関心を持つのが表象研究である。3つの研究を模式的に示すと図のようになる。

すべてのアーカイブ研究はまず表象研究、つまり特定の放送番組が特定の対象をどう表象しているかを、実際に番組を視聴して問うことから始まる。表象研究はその問いを探求することでひとまず終わるが、番組研究と対象研究は、それだけでは終わらない。番組研究は、個別の表象関係の知見を踏まえながら、個別の対象から比較的独立した、放送番組についてのより一般的な知見の獲得を目指すものである。また対象研究は、個別の表象関係の知見

図 アーカイブ研究の3分類



を踏まえながら、個別の放送番組から比較的独立した、対象についてのより一般的な知見の獲得を目指すものである。

表2にA～Cで示したのが各論文の研究分類である。今回選考対象となった61本の論文のうち、A.番組研究が15本、B.表象研究が18本、C.対象研究が21本となった。A～Cを合わせても総数の61本に足りないのは、AかBか、また、BかCかを判別できず、「AまたはB」「BまたはC」とした論文があるからである（「AまたはB」2本、「BまたはC」5本）。3つの研究分類は、研究をメタレベルで見たときの整理であり、研究者の問題関心が、この分類に拘束される必要はない。2分野にまたがる研究はこれからもあっていいし、今回は見当たらなかったが3分野すべてにまたがる問いを立てる研究もありうるだろう。

それでも今回、3つの研究分類を採用したのは、研究者の問いの類別に基づくこの分類によって、茫洋としていたアーカイブ研究が分節できるからである。のっぺらぼうの顔にいくらか目鼻がつくからである。これまで、アーカイブ研究と言われても、なかなか問いを立てられなかった研究者には、この3分類が一つのヒントになるのではないだろうか。

3-2 選考

今回われわれは、「トライアル研究」から生まれた論文の中から5本を選考し、5人の著者をNHK放送博物館に招いて、論文の趣旨を発表してもらった⁸⁾。

5本の選考を行ったのは4人の選考委員である（北本朝展、谷本奈穂、丹羽美之、宮田章）。各委員が番組研究、表象研究、対象研究の3分野（分野をまたぐものは便宜的にどちらかに

入れた）からそれぞれ1本以上を選ぶという条件で、1人5本を推薦した。4人の委員からのべ20本の推薦があったことになる。これを集計して複数委員の推薦を集めた4本をまず当選とし、残り1本を、他の委員と推薦が1本も重ならなかった委員の推薦で決めた。

選考の趣旨は、研究発表会の趣旨に準じたものである。すなわち「トライアル研究」の成果として、アーカイブ研究の一層の発展に資すると考えられる論文を各委員の責任で選考した。一元的に優劣の基準を定めて「優れた論文」を選んだものではない。

4. 今回発表された研究

選考の結果、発表5件の研究分類別の内訳は、番組研究2件、表象研究1件、対象研究2件となった。発表会では、1件あたり約40分



写真2 発表会場（NHK放送博物館 メディア・ラボ）



写真3 各発表者は閲覧番組の一部を上映

の発表が繰り返された。個々の発表者はスクリーンに適宜、説明資料を表示するとともに研究閲覧した番組の一部を上映した(写真2・3)。

以下、発表順にそれぞれの要旨を紹介する。

川野佐江子⁹⁾ 発表

「大相撲と力士の身体表象

—NHKテレビ番組で描かれる力士の身体性—

【分類：対象研究】表2-③

この研究は、大相撲の力士たちがテレビ番組でどのように表象されているのかを通じて、個的なものでありながら社会的なものでもある力士の身体について考察したものである。

発表者は、「NHKクロニクル」でキーワード「相撲」で検索して出てくるドキュメンタリー番組179件の中から、地域・年代とも幅広く網羅するよう80件を選定して閲覧した。力士を描いた番組は、次の6つに分類できたという。①力士の素顔、②力士の人生、③未来の力士、④日本固有の伝統としての相撲、⑤競技としての相撲、⑥社会現象としての相撲。それぞれについて解説がなされ、たとえば③では1958年放送『日本の素顔 櫓太鼓のかげに』、④では91年放送の国際共同制作番組『ザ・スモウ 英国人の見た大相撲』の一部が示された。

上記6種類の番組を閲覧し、発表者は、「個と社会をつなぐ」力士の身体に大きく2つの特性を見いだしたとして、それを提示した。

第1の特性は、力士の身体が「情緒が肉体を包み込む身体」であるということ。近代アスリートの身体は、感情とか情緒といったものを排除して究極の肉体だけで競い合うものとなっている。その背景には、「精神と肉体」、あるいは「自分と相手(他者)」との明確な区別がある。だが、力士の身体は違って、それ

はまさに「感情や情緒に凌駕される存在」だという。相撲は、「相手の身体を自分のものとして受け入れ」「相手に読み込まれて成立する競技」であり、「格闘技でありながら相手との勝ち負けだけにこだわらない」「自分との闘い」を追求する側面があるからだと言者は述べる。論拠の一つとして、85年放送『NHK特集 栃若 ～新国技館を動かす親方たち～』の一部が示された。

第2の特性は、力士の身体は「アンドロジニー(両性具有的)で、周縁的マスキュリティな(男性としては周縁的な)身体」であるということ。「お相撲さんは優しくて力持ち」が暗示する両性具有的な身体性が、男性ジェンダーと女性ジェンダーの共存という近代的二項対立構造への疑義となる存在だと指摘した(発表者はここに最も強い関心があるという)。また、力士の身体は「公的な裸体で格闘する身体」であり、西欧的審美性とは別のオリエンタルな美として存在しているとした。これを裏づけるものとして、先述の番組『ザ・スモウ 英国人の見た大相撲』が引用された。

最後に発表者は、力士の身体性に寄せる人々の期待に力士たちは応えようとし、その期待はメディアによってパターン化され、力士自身にまた戻ってくるということを述べ、身体が個的かつ社会的なものであることを改めて指摘した。

瀬崎圭二¹⁰⁾ 発表

「和田勉の演出技法

—芸術的テレビドラマの探求—

【分類：番組研究】表2-⑤

発表者は日本近代文学を専門としている。ここ20年ほど文学研究ではメディアと文学との関係を問う研究、特に最近では映画と文学との関

わりに注目する研究が盛んだという。発表者は、テレビも放送が始まったころは文学者から期待を寄せられていたことに気づき、その一端として、多くの作家にテレビドラマの脚本を依頼した和田勉の演出技法を調べることにした。

もともと文学少年だった和田は大学で演劇を専攻し、そこで、早くからテレビにおける芸術的表現の可能性を探っていた飯島正（文学者、映画評論家）の教えを受けた。1953年にNHKに入局してドラマ演出を担うようになり、59年、作家・安部公房、文芸評論家・花田清輝らの「記録芸術の会」に参加した。発表者はこれが重要だったと指摘する。その後、安部はじめ、谷川俊太郎、寺山修司らに脚本を依頼し、実験的なテレビドラマを作っていた。発表者はそれら50年代後半から60年代の番組10本ほどを閲覧し、和田演出に顕著な3つの技法を挙げる。発表会では、59年放送『日本の日蝕』、61年放送『人命救助法』などの一部を参照しながら3つの技法が説明された。

1つ目は、和田ドラマの特徴として有名な「クローズアップ」。その発想を、和田はどこから得たのか。出発点は大学時代の恩師である飯島のエッセー『テレビ方法論ノート』への共鳴だったと、発表者は指摘する。そこに述べられていたのは、テレビは画面が小さいのでクローズアップを用いるべきであること、テレビドラマの主体となるのは人間であり、人間関係のドラマと「文学的題材」は親和性があるということだった。和田のクローズアップは徐々に、人物だけでなく、その身体的部位、そして物をも対象にしていった。

2つ目は、「停止画像」。ドラマの中に写真やフィルムの1コマ、さらには文字表現だけの画像を挿入するものである（写真4）。

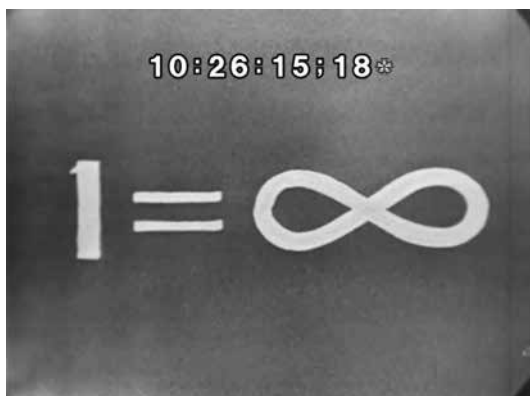


写真4 和田制作のドラマ
『創作劇場 あなたは誰でしょう』（1961）より

3つ目は「音響」。和田は聴衆の笑い声や拍手を入れたり、せりふを同一の音声として反復させたりするなど、通常のテレビドラマではありえない音響効果をししばしば用いた。

以上の3つの技法はいずれも、視聴者の意識を揺さぶり、予定調和的な日常性から解放するためのものであると発表者は述べる。その考察を深める手がかりとして、ドイツの劇作家、ベルトルト・ブレヒト¹¹⁾が提唱したという「異化」に言及した。それは、「出来事ないしは性格から当然なもの、既知のもの、明白なものを取り去って、それに対する驚きや好奇心をつくりだす」という概念（演劇論）である。50～60年代に和田が制作したテレビドラマは、既知のものを未知にする、ブレヒトの演劇論の影響を色濃く受けているとした。

轟里香¹²⁾ 発表

「テレビニュースにおける言語現象とその要因」

【分類：番組研究】表2-4②

言語学を専門とする発表者は、テレビニュースの言語に近年顕著な4つの現象——①体言止めの多用、②要点の省略、③疑問文の多用、④強調構文の出現——を指摘し、それが

始まった時期と、背後にある要因を明らかにしようとした。4つの各現象について、閲覧したニュース番組の一部を実例として数多く示しながら次のように説明した¹³⁾。

- ① 2012年の『ニュースウオッチ9』のある回では、60分の放送内で43回出てきた。「与野党が1勝1敗の結果となった参議院の2つの補欠選挙」と名詞で終わる表現。
- ② 各ニュースの冒頭(リード)でいきなり「700万円払った部下もいました」や「ほぼ4年3か月ぶりです」という言い出しで始まり、それだけでは要点が不明なものの、あとに続く内容を見てだんだんわかってくる構成。
- ③ 「株価の下落に歯止めがかからないのはなぜなのでしょう」「なぜ15人も人が犠牲になったのか」など。
- ④ 「第31回オリンピックの開催地に決まったのは、リオデジャネイロでした」といった、リオデジャネイロを強調する構文など(「リオデジャネイロが〜に決まりました」と比較するとわかりやすい)。

これら4つの言語現象は、「要点を後ろに置く」という点で共通していると、発表者は分析した。たとえば②要点の省略について、文学作品で用いられる手法と類似していると、藤沢周平の作品について言及した。最初の1文を読むと次を読まずにいられないよう、あえて1文目で“情報の空白”を作っておく手法だという。

次に、今回の閲覧で得られた知見として、4現象ともスポーツニュースのコーナーに多いということと、午後9時台のニュース番組において顕著だったということを指摘した。その理由を発表者は次のように考察する。スポーツニュースは娯楽的な要素を含むジャンルである

と見なすことができ、午後9時台以降は時間的に娯楽番組が多い。そのため、このような言語現象は「ニュース全体が娯楽的に脚色される傾向」としてとらえられるのではないかと。

発表者はこうした一連の言語現象を受けて、「クイズ型情報提供」という概念を示した。それは、重要な情報をクイズの解答のようにあとに回す情報提供の仕方を指す。疑問文の多用はまさにクイズ型であるが、要点を後置するほかの言語現象もこれに類似したものを見なしている。

以上をもって、発表者は「言語変化にとって社会的要因は非常に重要な意味をもつ」と結論づけ、言語変化の研究に必要な社会的な知見をもたらす資料として、NHKアーカイブスに保管されている放送番組の有用性を指摘した。

小杉亮子¹⁴⁾ 発表

「テレビに見る1960年代学生運動イメージの形成」

【分類：表象研究】表2-④

社会運動論・社会運動史を専攻する立場から、発表者は「テレビと1960年代日本の学生運動の、切っても切れない関係」に関心を持った。社会学者のパトリシア・スタインホフ(ハワイ大学教授)によると、60～70年代の新左翼運動について、日本では「否定的な集合的記憶」が作られているため、60年代学生運動をめぐる「時間の転倒」(実際に起きた順序とは別に、出来事が人々によって再建されること)と「回顧的再解釈」が起きたという。そこで発表者は本研究で、60年代学生運動を扱ったNHKのテレビ番組群においても、回顧的再解釈が発生しているのかを検証することにした。

まず、50年以降の番組を対象に「学生運動」「大学紛争」「全共闘」でキーワード検索し815件を抽出した。いずれのキーワードでも69年

放送のものが際立って多く出た。東大闘争の安田講堂攻防戦があった年である。また、815番組全体のうち東大に言及のあるのが2割近くあった。東大闘争は60年代学生運動で最も注目された事象と見なせる。発表者は最終的に、東大闘争を扱った23番組を詳細に検討した。

その中の、東大闘争に焦点を当てた長編ドキュメンタリーの4番組は、いずれも冒頭に安田講堂攻防戦が置かれる構成になっている。また、当時、安田講堂攻防戦より前から闘争に参加していた人々へのインタビューが紹介されるが、冒頭の攻防戦の場面のあとに置かれることで、番組内で時間の転倒と回顧的再解釈が発生しているという。例として1978年放送『ルポルタージュにっぽん おとこ東大どこへ行く』などの一部が示された。発表者は、「安田講堂攻防戦が60年代学生運動に関する記憶の帰結点かつ出発点になっている」「いずれは攻防戦に追いつめられて圧倒的な力の差によって敗北する非合理的な行動として、東大闘争が印象づけられたのではないかと指摘した。

さらに、23番組の詳細な閲覧で見いだしたこととして、「60年代学生運動に言及する際は、安田講堂攻防戦を映した同一の映像が繰り返し使用されている」ことが挙げられた。〈放水される安田講堂〉〈安田講堂の上でヘルメットをかぶって立てこもる学生〉〈安田講堂に催涙弾を撃つ機動隊〉の映像である。発表者は「60年代学生運動について思い出すことの全要素がここにそろっているのではないかと述べ、これら3つの映像が、23番組でいかに多く使われていたかを表にまとめて示した。

発表者が確認したかぎりでは、上記3映像を最初に放送した番組は、『1969年ニュースハイライト この一年』(写真5) だったという。そ

の映像の一部が示された。以降、60年代学生運動を語る番組ではこれらの映像が象徴的に用いられることで、「60年代学生運動をテレビ番組をとおして知る者や振り返る者に、回顧的再解釈の参照点を提供してきた」と指摘した。



写真5 『1969年ニュースハイライト この一年』(1969)より

小林敦子¹⁵⁾ 発表

「阿波おどり」の統一的集団舞踊への変容

【分類：対象研究】表2-⑤

発表者は本研究において、「民俗芸能の変容を社会情勢の影響下にあるものと捉え、阿波おどりにおける踊りの変容を文化人類学的に明らかにすること」を目的とし、その変容に関する諸言説を土台にして、映像資料等と言説の“穴埋め”をすること、裏づけをすることを試みたという。

阿波おどりは本来、自由に集団を組んで路上を練り歩く、「統一的な動作がない」踊りだった。その変容のきっかけは、「民俗芸能の観光化」にあった。1929年には阿波おどりの集団の審査が始まり、そこでは衣装の自由が制限され、楽器が必須とされ、当時流行した西洋風ステップが禁じられ、10人未満の集団は基準外とされた。現在の阿波おどりに至る変容の布

石になったことが、先行研究で指摘されている。

発表者は、阿波おどりの原型とされる「津田の盆踊り」^{ほに}との相違点を映像資料と写真資料により抽出し、①踊り手の上肢動作と下肢動作、②動作の統一性、③フォーメーションの有無、という3つの視点から分析を行った。

①の分析では、もともとは見られなかった踊り手の男女差が、戦後は様式がはっきり区別されていく過程を、今回の発表では、女性の足運びの変容を例に検証した。資料に用いたのは、50年代から60年代にかけて作られた、阿波おどりを描写した映画2作とテレビ番組だった。57年公開の映画『集金旅行』では、女性の踊り手はみな男性と同じ「平踏み」なのに対し、67年公開の映画『喜劇 団体列車』では、今とほぼ同じ「つま先立ち」になっている。そして、64年放送『新日本紀行 阿波徳島』では、平踏みの女性とつま先立ちの女性の両方が混在していた。つまり、ここが過渡期であったということを明らかにした。

②については、男性の踊りの動作が統一化した過程を分析した。70年代以前は、男性の踊りは同じ連の中でも個々人の自由性があったが、60年代後半から女踊りという統一的な動

作の様式が確立したことで、男踊りも影響を受けて連内で統一されるようになり、足運びも女踊りとの差異化が進んだという。参考映像として、70年放送『新日本紀行 阿波踊り考 ～徳島市～』の冒頭部分、阿波おどりの足運びを透明な板の下から撮影した映像が示された(写真6)。白足袋を履いた踊り手の足運びを克明にとらえた、極めて印象的な映像である。

③の分析では、各踊り手ばらばらの個人芸から集団芸舞踊への変化が戦後10年もたたないうちに見られるようになっていたという言説や、80年代前半に本格的なフォーメーションを開発した女踊りの名手の証言を紹介した。84年および89年放送の『日本列島ふるさと発スペシャル パーフェクトライブ・阿波踊り』の一部が示され、そうしたフォーメーションの標準化およびそのさらなる進展を裏づけた。

5. 結びにかえて

—アーカイブ研究の現在—

「トライアル研究」には、その誕生時、大きな期待がかけられた。メディア研究に携わる者にとって、放送番組のアーカイブの出現は、やや大げさに言えば「新大陸」の発見であった。

それまで「1回放送すれば終わり」「電波とともに消えてなくなるもの」で、「研究者もまともな研究や批評の材料になるとは考えず」にいた放送番組が、「公共的な知的活動の記録」として、また「貴重な文化的資産」として再認識され(「 」内はいずれも丹羽2009:51-52)、そのアーカイブへのアクセスが可能になったのである。

「トライアル研究」が始まって8年、この「新大陸」のありようは少しずつ明らかになってき



写真6 『新日本紀行 阿波踊り考 ～徳島市～』(1970)より

た。第3節で述べたように、各研究者が立てた問いの類別から、アーカイブ研究が、番組研究、表象研究、対象研究に3分類できることがわかった。この知見の獲得は、個々の論文がもたらした個別の知見とはまた別のレベルで「トライアル研究」の大きな成果であると考ええる。

付け加えると、今回発表された5件の研究が挑んだ領域は、番組研究、表象研究、対象研究のそれぞれにとって今後有望な問題領域であるように筆者（宮田）には感じられる。

番組研究では、瀬崎が挑んだように、ドラマやドキュメンタリー等のジャンルごとに番組制作技法を解明しようとする領域、また、轟が挑んだように、放送番組における言語使用のありようを解明しようとする領域が興味深い。

表象研究では小杉が挑んだように、テレビ映像による集合的記憶の形成をテーマとする領域が興味深い¹⁶⁾。

対象研究では、川野や小林が挑んだように、放送番組における人間の身体表象という領域が興味深い。とりわけ人間の身体の動きに照準した研究にとって、テレビ番組が鮮烈な資料性を発揮する可能性があることは、小林の阿波踊りの研究に見たとおりである。

2015年の時点で伊藤守は、アーカイブ研究を俯瞰して次のように述べている。「今日の研究は——アーカイブ研究がスタートしたばかりの段階であるからか——、アーカイブ研究という名を冠するに値する「独自の領域と方法の開拓はまだこれから」という段階にあると言わざるをえない」（伊藤2015:548）。

8年間の「トライアル研究」の実践、そして今回の発表会から、アーカイブ研究が得意とする「独自の領域」の輪郭が少しずつ浮かび上

がってきたように思われる。

ただし、その「独自の領域」を探求する「独自の方法」は依然として「まだこれから」の段階にとどまっているようである。

アーカイブ研究は、そのスタートから大きな方法的課題を抱えている。映像と音声をどう分析するかという課題である。

テレビドラマや、作品性の強いテレビドキュメンタリーを視聴した感想が各人で異なるように、映像と音声の受け取り方は、それを視聴する者によってさまざまである。幅広い受容・読解をもたらすことが、映像と音声によって構成されるテキストの大きな魅力であると言ってもよい。

しかしこれを研究しようとするとき、映像と音声はいわば「豊かすぎる」。映像と音声には多様な解釈可能性があり、それらを用いた研究は、もっと情報量の少ない媒体である文字資料を用いた研究に比べて、万人を納得させる客観性、説得性に欠けがちである。「あなたにはそう見えた（聞こえた）かもしれないが、私にはそうは見えなかった（聞こえなかった）」という反問にアーカイブ研究者は敏感でなければならない。

今回発表された5件の研究でも、論拠として示された映像や音声が「豊かすぎ」て、論旨がすっきりしないと感じる部分があった。

第4節に見たように、5件のうち轟の研究を除く4件の研究の論旨の大筋は、番組外の先行知見や文献資料によって構築されている。映像資料の多くは、小林が述べたように、もっぱらその「穴埋め」「裏づけ」に用いられている。もちろん論を運ぶにあたって的確な根拠となった映像・音声も少なくない。『新日本紀行』の白足袋の映像に驚かされたことは先述したとおりである。しかしその一方で、論拠として示さ

れた映像資料のいくつかは「微妙」であった。それらは発表者の論の運びに沿っているようにも見え、同時に、沿っていないようにも見えた。

アーカイブ研究者は、映像と音声で構成される放送番組がしばしば「豊かすぎる」資料であることを改めて認識すべきであろう。そして、その解釈多様性を縮減する方法の構築にもっと注力すべきである。今後の研究の展開に期待したい。

アーカイブ研究は、のっぺらぼうに目鼻がつき始めたばかりの、いまだ「幼い」研究分野である。しかしそれは、ユニークかつ重要な研究分野に成長する可能性を秘めている。今回の発表会には、その芽生えを感じさせるものがあつた。

この研究を大きく育て上げるために「トライアル研究」が、今後も長く、多くのアーカイブ研究者が意欲的な研究を寄せ続ける場として存続することを願ってやまない。そのためには、魅力的な研究が輩出することに加えて、「トライアル研究」を運営する側の努力も必要である。

発表会の最後に丹羽委員から、「トライアル研究」で使用された放送番組に、研究者一般がアクセスできるようにしてほしいという発言があつた。論文に書かれたことを他の研究者が検証するために必要だという理由である。研究者としては当然の要望であり、運営側は今後の課題とすべきであろう。

(みやた あきら/とりやべひろみ)

注：

- 1) 「NHK 番組アーカイブス 学術利用トライアル」公式ウェブサイト
<http://www.nhk.or.jp/archives/academic/>
- 2) 全国のNHK施設に設置されている番組公開ラ

イブラリーでは、「トライアル研究」の枠組みとは別に、NHKが過去に放送した代表的な番組1万284本(2018年3月末現在)を誰でも無料で閲覧できる。

- 3) 「NHK クロニクル」ウェブサイト
<http://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/>
- 4) 五十音順に、北本朝展(国立情報学研究所准教授)、谷本奈穂(関西大学総合情報学部教授)、丹羽美之(東京大学大学院情報学環准教授)。今回の発表会では、この3人に宮田章(NHK放送文化研究所上級研究員)を加えた計4人が選考委員を務めた。
- 5) 2014年までの初期においては、閲覧の日数、閲覧できる番組の本数ともこの限りではなかった。
- 6) 「トライアル研究」の事業プロジェクトは2009年に発足し、11月に公募、翌年1月に審査が行われ、3月から研究閲覧が始まった。本稿では研究閲覧開始の2010年3月を「トライアル研究」の起点とする。
- 7) 丹羽美之は「トライアル研究」がスタートする直前の時点で、想定されるテレビ研究として次の3つを挙げている(丹羽2009:59)。1:作品論や作家論など「作品」としてのテレビ番組に関する研究。2:テレビが社会におけるコミュニケーションをどのように媒介しているかを問う「メディア」としてのテレビに関する研究。3:テレビ番組を「資料」として利用するその他のあらゆる研究。丹羽はなぜこの3つになるか、また3つの研究は相互にどう関連するかを説明していないが、おおむね、上記1が本稿の分類でいう番組研究、2が表象研究、3が対象研究にあたる。
- 8) なお、「トライアル研究」は2011年5月に開かれたシンポジウムの中で一度、研究報告を行っており、そのとき選ばれた論文(表2-③⑦⑬⑱⑳)は今回の選考の対象としなかった。
- 9) 大阪樟蔭女子大学学芸学部准教授
- 10) 同志社大学文学部准教授
- 11) ドイツの劇作家、詩人、演出家(1898-1956)
- 12) 北陸大学国際コミュニケーション学部准教授
- 13) 発表者が研究閲覧したのは2011~12年。当時は「トライアル研究」でニュース番組も閲覧できた。
- 14) 京都大学大学院文学研究科特別研究員
- 15) 明治大学大学院情報コミュニケーション研究科 博士後期課程
- 16) 当然ながら、アーカイブ研究にとって有望な問題領域は、本文に示した領域だけにとどまらない。たとえば表象研究では、関礼子(表2-㉔)が挑んだように、特定の地域に注がれた放送番組の「まなざし」の経年的変化を問う領域も興味深い。

参考文献：

- ・伊藤守、2015。「テレビ番組アーカイブを活用した映像研究の可能性—分析方法・手法の再検討に向けて—」『社会学評論』65(4)、541-556。
- ・丹羽美之、2009。「アーカイブが変えるテレビ研究の未来」『マス・コミュニケーション研究』75、51-66。

表2 「トライアル研究」成果論文(発表順) ※2018年3月末時点

【研究分類】A: 番組研究 B: 表象研究 C: 対象研究

No.	研究者名 (所属 ※発表当時)	論文タイトル	発表先	刊行	研究 分類
①	設楽馨(武庫川女子大学)	「紅白歌合戦」に見る30年間の文字テロップ—1960年代から1980年代まで—	『武庫川女子大学言語文化研究所年報第21号』(武庫川女子大学言語文化研究所)	2010年11月	A
②	渡邊友一郎 (早稲田大学大学院)	感染症報道における「作動中の科学」の情報及び文脈の分析—新型コロナエンザ報道を中心に—	早稲田大学大学院政治学研究科・修士論文	2011年3月	B
③	堀江秀史(東京大学大学院)	寺山修司のテレビメディア認識—NHKアーカイブス発掘資料『一匹』(1963)を中心に—	『映像学第86号』(日本映像学会)	2011年5月	A
④	設楽馨(武庫川女子大学)	NHKクイズ番組に見る文字情報の変遷	『言語と交流 第14号』(言語と交流研究会)	2011年7月	A
⑤	崔銀姫(佛光大学)	儀礼と記憶:ドキュメンタリー『幻のイオマンテ〜75年目の森と湖のまつり〜』を中心に—(アイヌの研究)	『社会情報学研究 Vol.16 No.1』(日本社会情報学会)	2012年2月	B
⑥	堀江秀史(東京大学大学院)	比較文学研究の観点からみたテレビ番組の「資料性」—NHKアーカイブス保存の寺山修司関連番組を中心に(前・後編)	『寺山修司研究V』(国際寺山修司学会)	2012年3月	C
⑦	小林直毅・西田善行(法政大学)	テレビアーカイブとしての『水俣』—その可能性と課題—	『社会志林 第58巻第4号』(法政大学社会学部)	2012年3月	B
⑧	川島高峰(明治大学)	戦後放送メディアにおける「終戦特集」の形成—NHK短編映画『広島』(1957年8月15日放映)が登場するまで—	『明治大学社会科学研究所紀要 第50巻第2号』(明治大学)	2012年3月	B
⑨	設楽馨(武庫川女子大学)	NHKバラエティ番組に見る文字テロップの変遷—テレビにおける表記実態と機能の分化	『武庫川女子大学紀要人文・社会科学編第59巻』(武庫川女子大学)	2012年3月	A
⑩	崔銀姫(佛光大学)	帰属意識とは何か—アイヌ/若者/多文化社会—	『社会情報学研究 Vol.16 No.2』(日本社会情報学会)	2012年5月	B
⑪	山辺昌彦(政治経済研究所)	NHKアーカイブスに見る「平和のための博物館」・「平和のための戦争展」(空襲の研究)	『政経研究 98号』(政治経済研究所)	2012年6月	C
⑫	水島久光チーム(東海大学)	テレビ番組における風景の位相—映像アーカイブと日常の亡失に関する一考察(三陸の場合)	『東海大学文学部紀要』(東海大学文学部)	2012年9月	B
⑬	松戸修一チーム (静岡文化芸術大学)	テレビの中の農業・農村—NHK「明るい農村(村の記録)」を事例として—	『村落社会研究ジャーナル 37号』(日本村落研究学会)	2012年10月	B
⑭	崔銀姫(佛光大学)	「観光アイヌ」とは何か—まなざしの歴史的な変容をめぐって—	『社会情報学 第1巻2号』(社会情報学会)	2012年12月	B or C
⑮	轟里香(北陸大学)	スポーツニュースにおける格助詞「と」の使用について	『北陸大学紀要 36号』(北陸大学)	2012年12月	A or B
⑯	岩間優希(立命館大学)	ヴェトナム戦争とテレビ・ドキュメンタリー(論稿)	『アリーナ 2012 Vol.14』(中部大学総合学術研究院)	2012年12月	B
⑰	イヴォナ・メルクレイン (東京大学大学院)	Remembering the Oriental Witches: Sports, Gender and Shōwa Nostalgia in the NHK Narratives of the Tokyo Olympics	『Social Science Japan Journal』Winter 2013 16 (1)	2013年1月	B
⑱	井口高志(奈良女子大学)	映像の中に見る認知症の人の「思い」——ほけ・痴呆・認知症をめぐるケア実践の社会学	学術書籍『シリーズ福祉社会学② 闘争性の福祉社会学——ドラマトゥルギーとして』内(東京大学出版会)	2013年2月	B
⑲	本橋仁(早稲田大学)	“建築資料”とはなにか—自律分散システムによる建築アーカイブズの展望とその意識—	『アルケイア 第7号』(南山大学史料室)	2013年3月	C
⑳	好井裕明(日本大学)	被爆を描くドキュメンタリーを解説する—被爆表象の批判的エスノメソドロジーの試み—	『社会学論叢 第176号』(日本大学社会学会)	2013年3月	A or B
㉑	津田好子 (東京女子大学大学院)	NHK教育『おかあさんの勉強室』が描いた1980年代の幼稚園児と母親規範	『論集 第63巻2号』(東京女子大学)	2013年3月	C
㉒	金廷恩(上智大学大学院)	日本と韓国のテレビドキュメンタリー比較—「NHKスペシャル」「KBSスペシャル」「MBCスペシャル」を中心に—	上智大学大学院文学研究科新聞学専攻・博士論文	2013年5月	A
㉓	亀井修チーム (国立科学博物館)	映像アーカイブスの産業技術史研究への応用に関する一考察	『電気学会電気技術史研究会』(電気技術史研究会)	2013年5月	C
㉔	武田尚子(早稲田大学)	映像資料と社会調査方法—初期テレビ・ドキュメンタリー『日本の素顔』の取材対象と方法—	『武蔵大学総合研究所紀要 2012. NO.22』(武蔵大学総合研究所)	2013年6月	A
㉕	丸山友美(法政大学大学院)	ドキュメンタリーの「偶然性」—森達也『A』(1998)の映像分析による考察	『マス・コミュニケーション研究』(日本マス・コミュニケーション学会)	2013年7月	A
㉖	津田好子 (東京女子大学大学院)	教育テレビ番組『おかあさんの勉強室』が提示した母親規範—テレビがもつ「教育機能」に着目して—	『論集 第64巻1号』(東京女子大学)	2013年9月	B or C
㉗	木村至聖(甲南女子大学)	「記憶」化される炭鉱: 筑豊炭田の事例を中心に—NHKアーカイブス学術利用トライアル研究から—	『ソシオロジ』(京都大学社会学研究会)	2013年10月	B or C
㉘	丸山友美(法政大学大学院)	『日本の素顔』における「よきジャーナリズム」—「客観的」ドキュメンタリーの模索	『社会志林 第60巻第3号』(法政大学社会学部)	2013年12月	A
㉙	河原啓子 (日本大学・武蔵野美術大学他)	戦後日本社会における展覧会の史的考察	『青山史学 第32号』(青山学院大学)	2014年1月	C
㉚	川野佐江子 (大阪樟蔭女子大学)	大相撲とその力士の身体表象に関する研究—NHKテレビ番組で描かれる力士の身体性について—	『大阪樟蔭女子大学研究紀要 第4巻』(大阪樟蔭女子大学)	2014年1月	C

(次ページに続く)

No.	研究者名 (所属 ※発表当時)	論文タイトル	発表先	刊行	研究 分類
㉑	伊斐伸好 (拓殖大学)	NHKはルワンダ虐殺をどう伝えたか—日本のメディアとアフリカ—	『新日本学 平成 26 年春 第 32 号』(拓殖大学日本文化研究所)	2014 年 3 月	B
㉒	関礼子 (立教大学)	尾瀬・檜枝岐という「秘境」の変容—映像でみる保護と観光のまなごし—	『応用社会学研究 NO.56』(立教大学社会学部)	2014 年 3 月	B
㉓	杉本久未子 (大阪人間科学大学)	テレビが構築する沖縄イメージ—復帰前後の番組に見るシーンと語りの関係から—	『Human Sciences 第 13 号』(大阪人間科学大学)	2014 年 3 月	B
㉔	河原啓子 (日本大学・武蔵野美術大学他)	NHK アーカイブスの美術番組の系譜をめぐる研究	『武蔵野美術大学研究紀要 NO.44』(武蔵野美術大学)	2014 年 3 月	A
㉕	宇仁義和 (東京農業大学)	NHK アーカイブス保存映像の文化人類学的調査の可能性	『北海道民族学 第 10 号』(北海道民族学会)	2014 年 3 月	C
㉖	稲生衣代 (青山学院大学)	スペースシャトル報道の同時通訳	『紀要』第 55 号 (青山学院大学文学部)	2014 年 3 月	A
㉗	兼古勝史 (立教大学)	テレビ番組のサウンドアーカイブとしての可能性—「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」より—	『応用社会学研究』NO.56 (立教大学社会学部)	2014 年 3 月	C
㉘	稲生衣代 (青山学院大学)	米国大統領選挙から学ぶ大学の通訳クラス	『通訳教育論集 2014』(通訳教育指導法研究プロジェクト)	2014 年 10 月	C
㉙	イヴォナ・メルクレイン (東京大学大学院)	The taming of the witch: Daimatsu Hirobumi and coaching discourses of women's volleyball in Japan	『Asia Pacific Journal of Sport and Social Science 2014』	2014 年 6 月	C
40	木村至聖 (甲南女子大学)	「記録」された炭鉱の「記憶」と映像アーカイブの可能性—筑豊炭田の事例を中心に—	『ソシオロジ 59 巻第 1 号』(京都大学社会学研究会)	2014 年 6 月	B
41	森嶋平 (成城大学)	昭和 20 年代における内新王の結婚「平和」性と「恋愛」の強調	『成城文藝 第 229 号』(成城大学文学部部要)	2014 年 12 月	C
42	轟里香 (北陸大学)	テレビニュースにおける言語現象とその要因に関する一考察	『Osaka Literary Review 第 53 号』(OLR 同人会)	2015 年 1 月	A
43	吉岡有文 (立教大学)	日本の科学教育における映像メディアの学習論的・歴史的検討	『教育学科研究年報 第 58 号』(立教大学教育学科)	2015 年 3 月	C
44	小杉亮子 (東北大学)	テレビに見る 1960 年代学生運動イメージ：映像アーカイブ調査による 1960 年代学生運動研究の展開	『文化 78 巻 第 3・4 号』(東北大学文学部)	2015 年 3 月	B
45	木村至聖 (甲南女子大学)	テレビ・ドキュメンタリーにおける「山本作兵衛」像の構築	『炭鉱における生と死—語り・記録・炭鉱関係遺物に焦点をあてた研究報告—』(龍谷大学人権問題研究委員会)	2015 年 3 月	B
46	森嶋平 (成城大学)	1959 年皇太子ご成婚パレード, NHK 実況中継	『コミュニケーション紀要 Vol.26』(成城大学)	2015 年 3 月	B
47	稲生衣代 (青山学院大学)	テレビ・ニュースにおける字幕：制作サイドの視点からの考察	『翻訳研究への招待』第 15 号 1-18	2016 年 5 月	A
48	有田節子 (立命館大学)	日本語疑問文の応答の冒頭に現れる「は」について—係助詞から感動詞へ—	『国立国語研究所論集 第 9 号』(人間文化研究機構 国立国語研究所)	2015 年 7 月	C
49	竹下正哲 (拓殖大学)	物語にしかできない防災と復興—東日本大震災を 100 年後に伝えるために—	『ARENA2015 第 18 号』(中部大学総合学術研究院)	2015 年 11 月	A
50	瀬崎圭二 (同志社大学)	和田勉の演出技法—芸術的テレビドラマの探求—	『人文学 第 199 号』(同志社大学人文学会発行)	2017 年 3 月	A
51	山口俊雄 (日本女子大学)	ラジオ・テレビと石川淳—NHK 番組アーカイブス学術トライアルを利用して—	『日本女子大学大学院文学研究科紀要 第 23 号』(日本女子大学大学院文学研究科発行)	2017 年 3 月	B or C
52	小林敦子 (明治大学)	「阿波踊り」における「女踊り」の確立と「女の男踊り」の台頭	『舞踊学 第 39 号』(舞踊学会)	2017 年 3 月	C
53	小林敦子 (明治大学)	「阿波踊り」の変容における「ぞめき」	『徳島地域文化研究 第 15 号』(徳島地域文化研究会)	2017 年 3 月	C
54	小林敦子 (明治大学)	「阿波踊り」の統一集団舞踊への変容	『比較舞踊研究 第 23 巻』(比較舞踊学会)	2017 年 3 月	C
55	細井尚子 (立教大学)	東京文化コードとローカライズ文化—沖縄芝居と宝塚歌劇を例に—	『「近代日本」空間下の東アジア大衆演劇』論文集(立教大学アジア地域研究所)	2017 年 3 月	C
56	中野正昭 (明治大学) 細井チーム	博多中洲地区の劇場と軽演劇興行	『「近代日本」空間下の東アジア大衆演劇』論文集(立教大学アジア地域研究所)	2017 年 3 月	C
57	鈴木真奈 (京都大学)	〈研究ノート〉1980 年代前半のメディアに見る：ビデオゲームとマイコン文化の関わり	『科学哲学科学史研究 11 巻』(京都大学文学部科学哲学科学史研究室)	2017 年 3 月	C
58	川崎弘二 (大阪歯科衛生士専門学校)	NHK 東京において制作された電子音楽の調査 (1952 ~ 1968 年)	『情報科学芸術大学院大学紀要 第 8 巻』(情報科学芸術大学院大学)	2017 年 4 月	A
59	春日美穂 (大正大学)	古典文学作品関連番組の授業利用と基礎学力向上—『まんがで読む古典』シリーズを中心に—	『大正大学教育開発推進センター年報』第 2 号 (大正大学)	2017 年 6 月	C
60	石岡学 (同志社大学)	高度成長期のテレビドキュメンタリーにおける「青少年問題」の表象—NHK『日本の素顔』『現代の記録』『現代の映像』を対象に—	『教育社会学研究』第 101 集 (日本教育社会学会)	2018 年 1 月	B
61	川村志満子 (筑波大学大学院)	NHK テレビ番組で放映された湖沼に関する内容の分析	『水資源・環境研究 VOL. 30 NO.2』(水資源・環境学会)	2018 年 1 月	B or C

表3 トライアル研究・研究発表(65件)

	研究者名/所属	研究発表タイトル	発表先(学会など)	発表日
①	岩間優希(立命館大学)	「ベトナムから遠く離れて」と日本のベトナム報道	植民地主義研究会	2011年2月
②	松本明日香(筑波大学大学院)	テレビ政治討論会のアーカイブズ—日・英・米を比較して—	日本アーカイブズ学会	2011年4月
③	西田善行(法政大学)	水俣病事件報道のロケーション—1959年から73年のNHKニュース映像分析から	日本マス・コミュニケーション学会	2011年6月
④	崔銀姫(佛敎大学)	アイヌ表象と他者性の問題をめぐって:1950年代のテレビドキュメンタリー『コタンの人たち』を中心に	日本マス・コミュニケーション学会	2011年6月
⑤	堀江秀史(東京大学大学院)	テレビ番組の、学術研究「二次」資料としての可能性——寺山修司没後特集番組(NHKアーカイブズ保存)を素材として	国際寺山修司学会	2011年10月
⑥	稲津秀樹(関西学院大学大学院)	『移住』と『定住』の境界をめぐって—NHKアーカイブズ・『日系南米人』移民関連ドキュメンタリーを事例に	関西学院大学先端社会研究所研究会	2011年11月
⑦	山崎晶(四国学院大学)	テレビ的『知』の考察～『クイズ面白ゼミナール』を事例に	日本マス・コミュニケーション学会	2012年10月
⑧	轟里香(北陸大学)	テレビのニュースにおける言語変化に関する一考察—映像アーカイブを用いて—	日本社会学会	2012年11月
⑨	山崎晶(四国学院大学)	テレビ的『知』の考察に向けて～『クイズ面白ゼミナール』を事例に	テレビ文化アーカイブズ研究会	2012年11月
⑩	平井芽阿里(國學院大學大学院)	変化と改変の境界にみる共同性の再創造—沖縄県宮古島の村落祭祀を事例として	日本文化人類学会次世代育成セミナー	2012年11月
⑪	山本卓(法政大学)	テレビにおける社会保障—NHKアーカイブズ学術利用トライアル研究	法政大学法学部政治学科研究会	2013年3月
⑫	井口高志(奈良女子大学)	How have people with dementia been represented in TV documentary programs in Japan?	第28回国際アルツハイマー病学会議	2013年4月
⑬	亀井修チーム(国立科学博物館)	映像アーカイブズの産業技術史研究への応用に関する一考察	電気学会電気技術史研究会	2013年5月
⑭	杉本久未子(大阪人間科学大学)	日本に再包摂される沖縄社会—復帰前後のテレビ番組にみる基地・観光・日本	地域社会学会	2013年5月
⑮	木村至聖(甲南女子大学)	「記憶」化される炭鉱:筑豊炭田の事例を中心に—NHKアーカイブズ学術利用トライアル研究から—	関西社会学会	2013年5月
⑯	齋藤理恵(早稲田大学大学院)	ナムジュン・パイクとビデオアートの身体性	早稲田大学総合人文科学研究センター	2013年5月
⑰	井口高志(奈良女子大学)	How have people with dementia been represented in TV documentary programs in Japan?	国際老年学会 ソウル大会	2013年6月
⑱	齋藤理恵(早稲田大学大学院)	1970年代の日本におけるビデオ・アートと対抗文化との関わり—ドキュメンタリー映画『キカイデ ミルコト—日本のビデオアートの先駆者たち』を題材に	日本映像学会	2013年6月
⑲	齋藤理恵(早稲田大学大学院)	対話するビデオ—「ビデオコミュニケーション/Do It Yourself Kit」展と日本の映像表現	表象文化論学会	2013年6月
⑳	崎田嘉寛(広島国際大学)	東京パラリンピック大会(1964)に関する歴史的—一考察—NHKで放送されたTV映像に着目して—	東北アジア体育・スポーツ史学会	2013年7月
㉑	津田好子(東京女子大学大学院)	教育テレビ番組『おかあさんの勉強室』が提示した母親規範—母親を「教育」したテレビ	国際ジェンダー学会	2013年9月
㉒	武田尚子(早稲田大学)	映像がとらえた「格差」—高度経済成長初期のテレビドキュメンタリー	日本都市社会学会	2013年9月
㉓	丸山友美(法政大学)	ドキュメンタリーの(都市)へのまなざし—NHK『日本の素顔』に現れる東京と大阪	日本社会学会	2013年10月
㉔	船戸修一チーム(静岡文化芸術大学)	テレビにおける『農業・農村』表象とその構築プロセス(1-4)—NHK『明るい農村(村の記録)』を事例として—	日本社会学会	2013年10月
㉕	武田尚子(早稲田大学)	瀬戸内漁民と口承文化—尾道市因島地区における家船の生活経験と歌謡—	日本社会学会	2013年10月
㉖	木村至聖(甲南女子大学)	石炭産業の終焉はいかに記録/記憶されたか	日本社会学会	2013年10月
㉗	宇仁義和(東京農業大学)	NHKアーカイブズの保存映像に見るアイヌと樺太先住民、そして捕鯨	北海道民族学会	2013年10月
㉘	小林田鶴子チーム(共栄大学)	放送番組のサウンドアーカイブとしての可能性—「NHKアーカイブズ学術利用トライアル研究」中間報告—	日本サウンドスケープ協会	2013年11月
㉙	笹部建(関西学院大学)	文化人のテレビ表象における人格信頼	日本広告学会 関西支部	2013年12月
㉚	斉藤こずゑ(國學院大學)	映像メディアにおける発達表象の構成	日本発達心理学会	2014年3月
㉛	廣内大助チーム(信州大学)	NHKアーカイブズ災害映像に基づく2000年東海豪雨の報道マッピングの試み	日本地理学会	2014年3月
㉜	笹部建(関西学院大学)	タレント政治家たちの信頼性	関西社会学会	2014年5月

(次ページに続く)

	研究者名/所属	研究発表タイトル	発表先(学会など)	発表日
33	李旼胃(東京大学)	山谷とその日雇労働者の表象分析—1970年代テレビドキュメンタリーの形式的試みとの関係の中で	日本マス・コミュニケーション学会	2014年5月
34	大島律子(静岡大学)	Instructional Design for Facilitating University Students' Metacognitive Organizational Knowledge of How a Productive Organization Functions	World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications	2014年6月
35	井口高志(奈良女子大学)	How new is the image of people with dementia in 21st century in Japan? An analysis of TV documentary programs in the NHK data archives	World Congress of Sociology (WCS) 世界社会学会議	2014年7月
36	大島律子(静岡大学)	Change Laboratory Approach をふまえた学習環境デザイン	日本教育工学会	2014年9月
37	堀江秀史(東京大学大学院)	〈音〉と物語に関する比較芸術研究	2014年度若手奨励研究コロキウム(東大比較文学会主催)	2014年12月
38	斉藤こずゑ(國學院大學)	映像メディアによる発達表象と時代効果	日本発達心理学会	2015年3月
39	川野佐江子(大阪樟蔭女子大学)	大相撲力士の身体表象に関する研究—構築され消費される男性性と「横綱柏戸」—	日本スポーツ社会学会	2015年3月
40	斉藤こずゑ(國學院大學)	公共放送、映像メディアによる子ども表象の妥当性	日本発達心理学会	2016年4月
41	イミンジュ(東京大学大学院)	From 'underclass-ghetto' to 'welfare-ghetto': Traces of territorial stigmatization of Sanya in Tokyo and its people from 1970s to 2000s	カルチュラル・タイフーン2016(カルチュラル・スタディーズ学会)	2016年7月
42	イミンジュ(東京大学大学院)	Still Blaming the Victim?—A Case Study of Japanese Television Documentaries on "New Poverty" in 2000s	IAMCR (International Association for Media and Communication Research)	2016年7月
43	加藤美生チーム(東京大学大学院)	テレビ・ドキュメンタリーが描いた患者像とその変遷—患者の語りが届けるもの—	日本ヘルスコミュニケーション学会	2016年9月
44	鈴木真奈(京都大学)	1980年代前半におけるテレビメディアの「マイコン」解釈	社会情報学会	2016年9月
45	辻泰岳(東京大学)	展示空間の中の「現代の眼」:国立近代美術館の会場設計について	明治美術学会	2016年9月
46	細井尚子(立教大学)	關於全球化現象下文化「在地化」方法之考察—以近代日本「少女歌劇」類藝能表演型態為例	「東亜大衆戯劇国際学術研討会」於台湾・台北芸術大学	2016年10月
47	中野正昭(明治大学) ※細井チーム	従表演方法切入「女優」的近代定位—以帝劇女演員森律子為研究對象—	「東亜大衆戯劇国際学術研討会」於台湾・台北芸術大学	2016年10月
48	今中舞衣子(大阪産業大学)	NHKフランス語教育番組における出演者の役割の歴史の変遷	日本フランス語教育学会	2016年10月
49	川崎弘二(大阪歯科衛生士専門学校)	NHKアーカイブスの利用によるNHK電子音楽スタジオで制作された電子音楽作品の調査	「戦後日本におけるマス・メディア受容と現代芸術の文化学」シンポジウム	2016年11月
50	小林敦子(明治大学)	『阿波踊り』の統一的集団舞踊への変容	比較舞踊学会	2016年11月
51	川村志満子(筑波大学大学院)	NHKテレビ番組で報じられた湖沼環境問題	社会情報学会 東北支部	2017年3月
52	根岸貴哉(立命館大学大学院)	雑誌『野球界』における野球表象	大正イマジナリイ学会	2017年3月
53	斉藤こずゑ(國學院大學)	公共放送における子どもの表象と引用映像の機能	日本発達心理学会	2017年3月
54	中野正昭(明治大学) ※細井チーム	ある学生エキストラからみた築地小劇場—新資料「水盛源一郎『小説 築地小劇場—築地の人々—』」をもとに—	日本演劇学会	2016年7月
55	中野正昭(明治大学) ※細井チーム	博多中洲地区の劇場と軽演劇興行	『近代日本』空間下の東アジア大衆演劇(国際シンポジウム)	2017年1月
56	細井尚子(立教大学)	『東京文化コード』とローカライズド文化—沖縄芝居と宝塚歌劇を例に—	『近代日本』空間下の東アジア大衆演劇(国際シンポジウム)	2017年1月
57	太田奈名子(東京大学大学院)	占領期ラジオ番組『質問箱』について—番組内容とGHQ占領政策の関連性を談話分析から探る—(2017)	日本マス・コミュニケーション学会	2017年6月
58	大城由希江(神戸大学大学院)	日本本土メディアが描いた米軍占領下沖縄「NHKアーカイブス」音声資料の分析から(2017)	日本マス・コミュニケーション学会	2017年6月
59	野島那津子(日本学術振興会)	『論争中の病』の社会的表象の形成過程に関する一考察	科学社会学会	2017年7月
60	崎田嘉寛(広島国際大学)	東京パラリンピック大会(1964)に関する歴史的考察—NHK制作の記録映画「パラリンピック東京大会」に着目して—	東北アジア体育・スポーツ史学会	2017年7月
61	下郡啓夫(函館工業高等専門学校)	幼児教育番組「おかあさんといっしょ」におけるバラ言語の活用	日本教育メディア学会	2017年7月
62	森本真由美(白百合女子大学大学院)	祈る「場所」を創造する受難劇に見る、宗教性発達の検討	日本カトリック教育学会	2017年9月
63	洞ヶ瀬真人(名古屋大学大学院)	60年代ドキュメンタリー表現の複雑化—「記録映画」と『日本の素顔』の比較分析—	日本マス・コミュニケーション学会	2017年10月
64	村野井均(茨城大学)	時制の教育におけるNHK教育テレビの役割—「さわやか3組」の時制分析—	日本教育メディア学会	2017年10月
65	佐々木基裕(名古屋女子大学) 伊藤すみれ(京都大学大学院) ※稲垣チーム	現代若者におけるNHK「連続テレビ小説」の受容—視聴者アンケート調査の分析を中心に—	日本教育社会学会	2017年10月